

# べっふの文化財

№10

## — べっふのまつり —

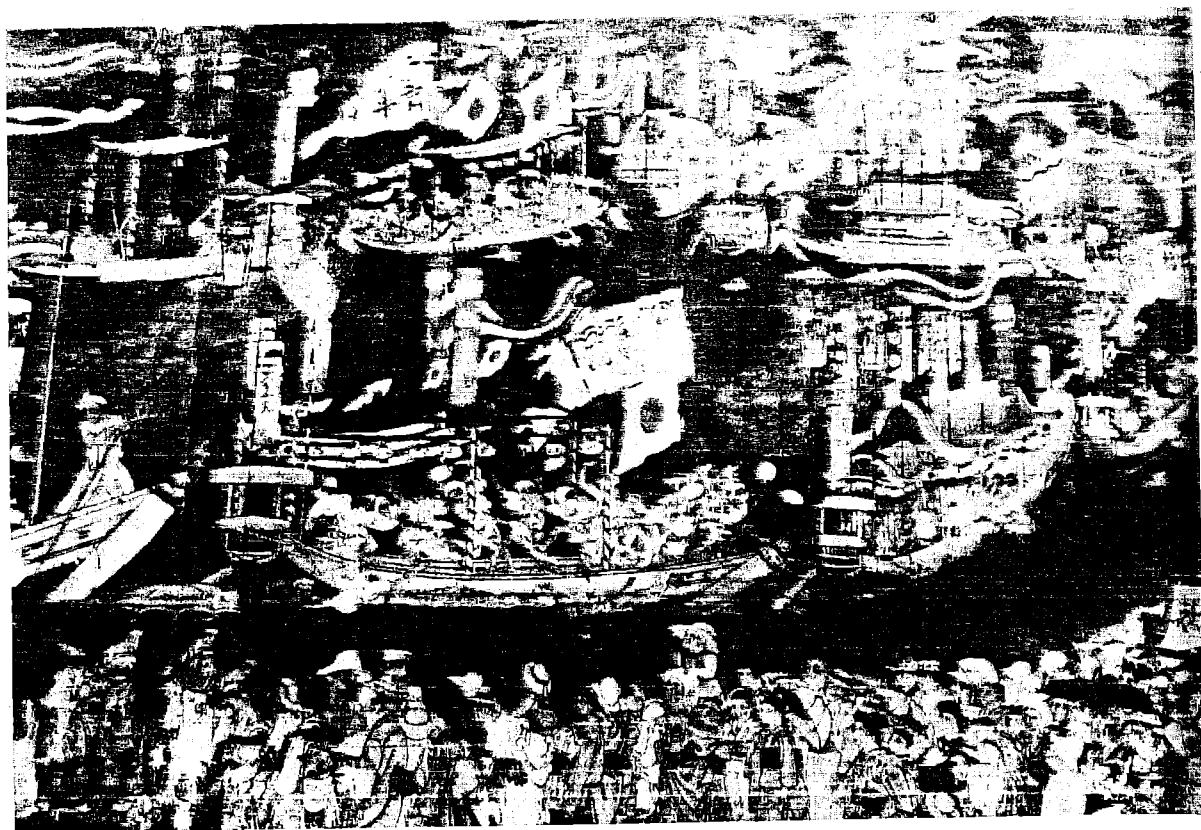
八幡朝見神社の祭礼行事

住吉神社の夏まつり—海上渡御—

北鉄輪天満宮の秋まつり—オハケおろし—

浜脇薬師まつり—風流見立細工—

— 遍上人と永福寺の湯あみまつり



(大正期の住吉社海上渡御図)

別府市教育委員会  
別府市文化財調査員会

別府市美術館

# 八幡朝見神社の祭礼行事

温泉祭り	4月1日～5日
ちょうちん祭り(献燈祭)	6月30日
甘酒祭り	10月19日

小玉洋美

## 1. 神社の沿革

社伝によると、八幡朝見神社は建久7年(1196)大友能直が鎌倉の鶴ヶ丘八幡宮を勧請して、龍ヶ丘(現在の乙原)に奉祀したのが起源とされている。以来、豊後八幡七社の一つとして大友氏歴代の尊崇を受けてきたが、社地が崩壊したので現在地に遷座した(「朝見八幡宮勧請由来記」)。

明治6年(1873)村社ならびに別府・浜脇の総社として位置付けられたが、大正7年(1918)郷社に列せられ昭和12年(1937)には県社に昇格した。戦後の昭和36年には別表神社となり、旧官国幣社と同格となった。また、原(旧別府公園)にあった温泉神社を合祀して現在に至っている。

## 2. 温泉祭り

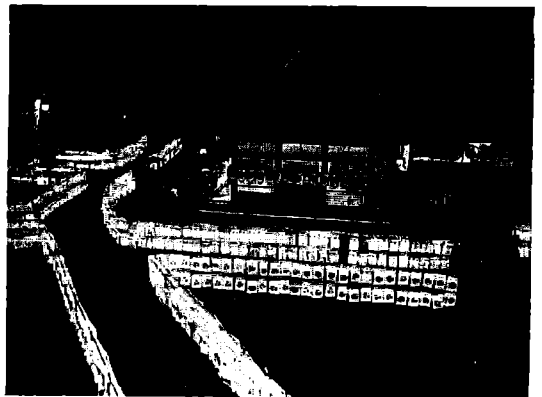
同神社の年中行事をみると、現在では1月1日の歳旦祭をはじめ年に13度の祭典が執行されているが、古来八幡様の祭りとして氏子が参加してきた祭礼は、春の旧2月初卯祭と夏旧6月30日の夏越祭、秋旧10月の例大祭であった。春祭りは、今日では祈念祭のみであるが、同社に合祀してある温泉神社の祭りが拡大されて、4月1日より5日間の「別府温泉まつり」を繰り広げている。したがって、温泉祭りの開会報告祭は八幡朝見神社で執行されるのが例となっており、松原公園にある同社の御旅所に御神幸をしているが、古来の八幡様の春祭りとは、歴史的には、結びつかない祭りである。

温泉神社は大正八年(1919)に字朝見の長谷社と字山下の愛宕社を合祀して、字原に創建された新しい神社で、昭和の初め頃、別府公園の社殿から今の仲良公園まで御神幸が始められたに過ぎない。御旅所では鳩替え行事なども行なわれたが、当初から商業的色彩の濃い祭礼であった。昭和6年、商工会議所の主催していた温泉神社の豊年まつりを「別府温泉まつり」と改めて、全市をあげての連合祭として以来、別府市を代表する年中行事となっている。

## 3. ちょうちん祭り

6月30日の夏越祭りには、大祓神事が執行される。ハラエ(祓)は随時行なられるが、6月と12月の各晦日の祓は大祓と呼び、前者をナゴシ(夏越)後者をト

シコシ(年越)の祓という。神社で行なられる夏越し神事には人形に穢れを託して水に流す方法と茅の輪をくぐる方法とがあるが、八幡朝見神社でも戦後に「茅の輪行事」を始めている。以前は拝殿前の鳥居の所に作っていたが、現在は拝殿の前にチノワを作って参詣



者にくぐらせている。これをくぐれば、無病息災、穢れを払うという信仰によるものである。正式には、紙の人形に年齢・氏名を書いて穢れを祓ってもらい、茅の輪をくぐる時には「水無月の夏越の祓する人は、ちとせの命延ぶというなり」という歌を唱えなければならぬとされている。

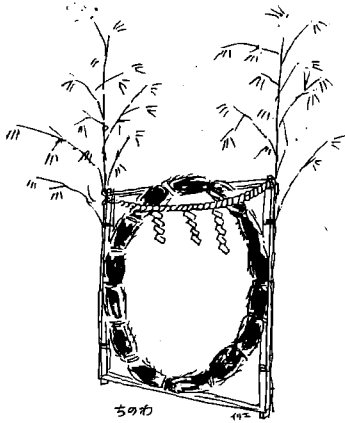
八幡様の総本社である宇佐神宮の夏越祭にも、八幡朝見神社と同じような茅の輪が設けられているが、これは戦時中ではじめられたもので、古来の行事ではない。御神輿三基が御旅所についてから、直ぐに神官だけで執行される「菅抜け神事」が本来の大祓の儀式である。朝見神社においても、御神幸の後、松原の御旅所に続く海浜で「菅抜け神事」が行なわれていたという話を聞いたことがあるが、あるいは筆者の記憶違いかも知れぬ(この点ご教示願えれば幸甚である)。ところで、民間においても旧暦6月晦日はオンバラエの行事が流布して、年中行事となっていた。県下の各地では、海や川に牛・馬を連れて水浴びに行き、また、この日に7回水浴びすると厄除けになるという所もある。

さて、朝見神社の夏祭りを俗に「ちょうちん祭り」というが、これは神輿が御還幸する際に、各町内から提燈を掲げてお供をする慣わしがあったことによる。

参考までに是永 勉氏『別府今昔』（大分合同新聞社刊）から引用すると、

夏まつりは「ちょうちんまつり」で町内からくり出す高張りちょうちんが400も500もつづいた。おとなのは普通の高張りだったが、子供のは小ちょうちんが両側についた小さなもので、（中略）渡り拍子の笛、太鼓をまじえたにぎやかな行列で、松原を出発した先頭が朝見神社に到着しているのに、最後尾のちょうちんはまだ松原に残っていた。こんなすばらしい名物も太平洋戦争でローソクが無くなったり青年が戦争に出ていったために消えてしまった。

（同書P 272）



戦後は御還幸のちょうちん行列が復活したこともあったが、戦前ほどの賑わいはみられず、最近では氏子有志の方々が奉納する木製角型の白紙をはった燈籠に変化し、10年前より松原御旅所への御神幸が中止されたので、現在では「献燈祭」と呼んでいる。もともと、「ちょうちん祭り」もさして古いものではなく、江戸時代には朝見川沿いの御神幸道が狭くて、多人数では危険なので神輿のお上りも明るいうちに行なわれていたといわれる。しかし、明治37年（1904）頃には「庚申橋から朝見まで家らしい家が多かったので、お祭りの行列が松原のお旅所を出て土手のお通り道を高張りちょうちんの光の列になって、八幡様に帰ってくるのが手にとるようによく見えた」（『別府今昔』P 340）というから、日露戦争頃には「ちょうちん祭り」になっていたのは疑いない。大正3年（1914）松原公園が造られて後、市内の神社の夏祭りが連合祭となって、お旅所の前には朝見神社の御神輿を中心にオミコシが並び、お上りには八幡様と同じように高張り提燈の行列がみられたというが、「ちょうちん祭り」は八幡朝見神社のものであった。

#### 4. 甘酒祭り

八幡様の大祭は旧10月に行なわれる。現在は新10月19日を例大祭としているが、江戸時代末期の天保15年（弘化元年・1844）の記録「同十月八日より十二日まで御祭礼諸雑費控」（『講萬控』）によると、8日から11日まで夜神楽3番、9日昼は7番、12日は御還幸のために昼神楽3番が御旅所で奉納されている。夜神

楽に際しては、社人になますといわしを肴として白酒が振舞われ、また、9日の昼神楽に当っては白酒と大根・いも・午房・ちくわ・いわし・こんぶの煮めと祝1皿が肴として出されている点に注目したい。さらに8日は朝・昼・夜とも社人・人足30人分の献立が準備されている。恐らく松原御旅所への「お浜下り」の人数と思われるが、さらにさかのぼって寛延2年（1749）10月の「朝見宮御神事」によると、

一、当祝（ほうり）相当り候神官（じんが）、九月初旬より祭酒造込可申候、尤新規ニ酒部屋を建候而神主より御祓有之。

右御神酒九月廿八日任先例御口明ヶ、其節神官、相祝部（あいほうり）立会御神酒口ヲ開ク

という記述があり、秋祭りの際に新しく酒部屋を建てて白酒を醸造していたことがわかる。ここでホウリ（祝）、アイホウリ（相祝）とあるのは、朝見神社に付属した太座に属する16軒から順番に選ばれた人々で、祭礼の世話をする座元を勤めることになっていた。同神社には浜脇の漁民7人からなる魚座と浜脇の歳大明神のジंगा（神官）12人の座、さらに祭礼のとき流鏝馬を奉納する役をしていた畑8人の座が付属していた。「十月三日座居之次第鎌倉之以神例当社之御神役ヲ勤ル者也」と紙面中央に書かれた座配置見取図（一紙・年月なし）には、上記の座の集落名が絵で記入され、人名を含めて43を数える。大宮司以下47名の参加によって神事が営まれていたわけである。

祭礼の経費は、神事に参加できる特権をもつ座衆が負担するのが通例であるが、江戸時代末には氏子区域である浜脇・田野口・別府・朝見の4ヵ村から均等割で出し他に氏子中の有志から寄付を仰いでいた。参考までに天保15年（1844）秋祭りの「賄方諸雑費」より収入分をみると、4ヵ村より各2貫500文計10貫文、有志15軒より神楽奉納代1貫900文と村中から御神酒代2貫418文を寄付されている。支出については省略するが、直会の経費や人夫賃など詳細に記されていて面白い。その中で9月の箇所にはコウジ19枚と米2斗を購入したと記されているのは、上述の寛延2年の史料にみられるように、祭礼用の白酒を仕込むための出費と考えられる。

ところで、『別府今昔』に「十月の秋まつりは別名を甘酒まつりと呼ばれ、島屋全盛時代はお旅所で接待する甘酒は島屋でつくっていた」と記されているのは、明治になって酒税の関係で白酒造りが禁止されたので、甘酒に切りかえた結果に他ならない。現在も大田村に残っている「どぶろく祭」や湯布院町塚原の「甘酒祭」などにかつての八幡朝見神社の秋季祭礼の姿を垣間見ることができるのを付記しておきたい。

# 住吉祭り

海上渡御 7月27日

入江秀利

はなやかな海上渡御がおこなわれる住吉まつりは、市内松原（旧住吉区）に鎮座する住吉社の夏の祭礼行事である。

古記録によれば、住吉社の起源については、宝暦四年に摂津の住吉大神の神霊を万登浜（的浜）に勧請して祠を建てて祭ったと記されている。現在の社地へ鎮座したのは、朝見八幡社の無名古文書（寛政3亥年）によると「右御旅所（朝見八幡社の）ノ内南ノ方ニ住吉宮一社御鎮座有之、摂津ノ住吉宮ヲ奉御勧請只今迄八拾年程罷成申候……」とあることからその後、約八拾年後の寛政3年には遷宮したことになる。

（※まとはが浜は、旧棧橋付近より境川口川に至る砂浜のことである）

住吉社の夏祭りの神幸祭は、神幸と海上渡御をうけもつ地元の住吉・上・下向浜の祭組と、神輿の先達を務める楠浜の「ほうあんえ」の二座が主要な役割を分担してとりおこなわれた。これは、住吉社の鎮座の由来に関係があるものと考えられる。

地域の経済・社会の変遷が祭祀組織をくずし、信仰の本質をかえるといわれるが、住吉祭りにおいても、ずい分簡略化がすすんでいる。以下は、地域の古老の記憶をもとにして明治後期・大正・昭和初期の祭礼行事を中心に記録したものである。これらのなかには現在おこなわれていないことがらいくつがある。

## 1. 祭の組織と司祭者

神事及び祭礼行事をとりしきるのは、住吉・上・下向浜の三地区の長老格より選ばれた二名のザマエ（座前）である。さらに、十人組（祭典取締）がそれぞれ祭の諸役を分担した。神職は宝暦年代より朝見八幡社の神氏が司っている。また、神輿かつぎは、株持ちの家が十二軒あり、それぞれの株持ち家の青年か、もしくは当年限り株を借りた青年に限られていた。

## 2. 祭日と祭礼行事

ア. 祭日 以前は旧暦の6月27日前後で、海上渡御の関係から潮の干満の適当な日におこなわれていたが、大正初期より現行の7月27日に定められたそうである。

イ. 物忌み 神輿かつぎの青年十二名は、祭礼の7日前より住吉社の拝殿で宮ごもりをして物忌みに服した。物忌みの期間中でも漁労作業に

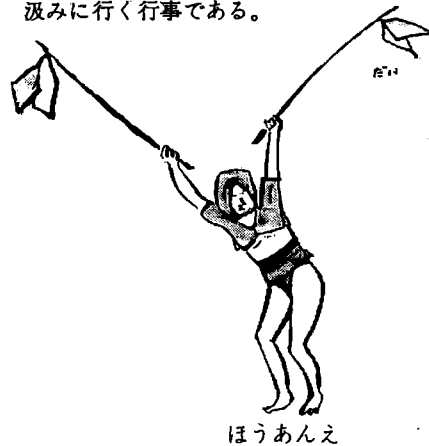
は従事し、ショーバイのうえでは特別な禁忌はなかった。ただ、女性との交渉は強くいましめられ、女性が調理した食事は口にせず、また、母親とも口をきかなかった。

○ 神輿かつぎは前述のごとく株持ちの家の青年にかぎられていたが、酒一升で株を借りることができ、戦時になると徴兵検査、あるいはわ応召の可能性のある青年に解放された。

ウ. 宵宮（ヨド） 夜7時頃に朝見八幡より神主がきて祝詞をあげた。お舞堂（神楽殿）で深更まで与興が催されていた。現在では翌日の祭礼の準備に費やされている。

エ. シオカケ（神輿あらい） 祭り当日、神体奉納前の神輿の潔めと、神輿かつぎの最後のみそぎをおこなう。神輿かつぎの青年は、フンドシのみの裸、素足で浜まで神輿を運び海水をかけ、神輿かつぎも海水でみそぎをおこなう。海岸が砂浜であったむかしは、神輿をかついだまま海につかった。掃りは白緒のワラジをはいて掃った。このときはいたワラジは、祭りが終るまで決して脱がない。拝殿に掃った神輿かつぎの青年は、白の六尺褌に裾の短い白衣、白鉢巻といった神輿衣裳を身につける。

オ. 水クミ（「ほうあんえ」の行事） 住吉神社での祭典準備と平行して、楠浜の「ほうあんえ」が船で沖を通過して浜脇の清水（井戸水）を汲みに行く行事である。



舟一艘にチョーケ（長桶）一荷の水を三度汲みに行った。一番水は「ほうあんえ」の座前が汲みに行った。水はナオライの調理にもちいられた。ナオライは座前の家で本膳になおしてお神酒をいただいて、赤いほ、かぶり、赤のカタマワシ（肩まわし）と赤の六尺褌のいでたちで、手に手に菱形紙をたばねて竹の先につけたダイをもって住吉社におもむく。

- 清水は両郡橋より別府よりあるソースの卵水を汲んだとか、秋葉社下のアメガタ屋横の井戸水、西町の角井所とか諸説があるが、最近では西町の角井所の水を汲んでいるそうである。
- 「ほうあんえ」の水クミ舟を陸（オカ）から眺めて、「一番が通った」「二番が通った」と住吉社では神幸の準備の目安にした。

カ. オクダリ 御神霊は、神輿を本殿に入れ、幕を降して神主一人で奉納する。神霊が入ると神輿が急に重くなるという。神幸行列は「ほうあんえ」、賽銭箱と供の青年が囃す太鼓・鉦をつけた囃山車を供に、中心を神輿が行く。神輿は十人がかつぎ、輿前に潮まきと、後にしんがりの各一名がつく。御旅所は向浜・浜脇・楠浜・北浜・海門寺などの網元や旧家にあてられ、お、よそ35カ所ほどあった。神輿は門前に笹二本に注連なわをわたした祭場におやすみになる。神輿が御旅所におやすみになるときは、いったん祭場の前を通りすごし、また引きかえしてきて波形のガブリを行なっておつきになる。波形のガブリは住吉社独特のもので、差し上げた状態から一方にかたむけ、ちょうど波がうち寄せるように斜め下方に流れるように移動させ、また、差し上げて同じようなガブリをくりかえしておつきになる。御旅所では朝見八幡社の神主が祝詞をあげる。

キ. 海上渡御 向浜の船溜りを出船した船団は、神輿の御座船を中心に定められた船列で海上渡御をおこなう。最盛期では30艘ちかくの供船が渡御のお供をしたといわれる。供船は2丁櫓の網船が多く、それぞれ屋形をしつらえ大漁旗や船印と笹を立て提燈などで飾られる。最盛期には唐破風の屋根をもった屋形もあった。供船にはそれぞれの地区の青年が乗り、鉦をたたいてにぎやかに船囃をかなでる。供船の先頭は向浜で、向浜以北の地区の供船が先に、以南の供船が後に続いた。しんがりは向浜の子供船であった。船列の中心は御座船で、その先を「ほうあ

んえ」の權テンマがホーアンエーのかけ声をかけて先導する。

行程は、先ず南にむかい東別府駅付近沖まで行き、折返して北上し向浜沖合に至り、旧棧橋の船溜りより上陸する。元来、海門寺・北浜・楠浜方面の神幸は上陸地が異っていたので、上陸・乗船・渡御がそのたびにおこなわれた。

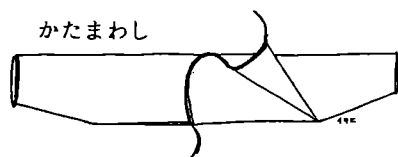
ク. オノボリ 楠浜地区の神幸がおわり、神輿が乗船すればオノボリである。暗くなった海上を明々と灯をともした輿船が迎え火に迎えられて向浜の船溜りに帰ってくる。上陸後は浜脇・向浜地区をへて深更住吉社に還幸する。社頭で、盛大にガブリ、拜殿に突進する神輿を青年や中老が何度も押しもどし、やがてオツキになる。神輿カツギはその夜拜殿に宿泊する。

### 3. ほうあんえ

「ほうあんえ」は楠町の区民のみで組織された特権的団体である。「ほうあんえ」はダイを振って神輿や海上渡御の先達をつとめるなど、住吉祭礼にとって主要な役割をつとめる団体である。「ほうあんえ」は「宝安栄」「蓬萊え」など文字をあてるが定だかでない。現在ほうあんえは向浜の区民が受継いでいる。

幕藩時代に別府村で生産された生姜・七島蘭や蔵米を大坂に輸送するオオフネをもつ廻船業者が楠浜に多く、航海安全の守護神として住吉社を勧請したことは前にのべた。慶応三年写の託宣にある、住吉大神の加護で伊豫沖での難波をまぬがれて住吉大神を勧請した「豊後国速見郡別府村ナル舟人」永井右京も楠浜在住の船主であったのであろう。（ダイは采一サイ一）

#### ア. カタマワシ（肩廻し）（図）



イ. カイテンマ（權伝馬） 權伝馬は水汲みと海上渡御の先達をつとめる小舟のことである。海上渡御の時には、「船ばり」に旗竿を立て、住吉丸の船印をかかげ、竿の上部より「おもて」と「とも」に綱を張り提燈などをつるして飾る。

ウ. 乗り組み カイモチ（カイフリ・カイビキ）といわれる漕ぎ手が左右に三名つつ計六名（現在は八名）で漕をネル（漕ぐ）。後部に櫓太鼓をたたく者一名、「とも」に櫓を二段に積んで一名のダイ振りがあがる。その他交代要員が若

千名乗り組む。

エ. ダイ (采) フリ 普通、浴衣に紺のたすき掛けといういで立ちで樽の上立ち、のけぞらんばかりの大きな所作で両手のダイを振り音頭をとる。

オ. 海上渡御のはやし (鉦と樽太鼓) 鉦をつるし内側をしゅ木で「コンコンチキリン」とたたき、太鼓がそれに合わせる。擧伝馬では、ダイ振りが「ホーランエンヤサ」とダイを上下左右に振ると、カイビキが「ホーランエーノヨン

ヤサノサッサ」と唱和しながら擧を引く。擧はシュロを巻いて船に取りつけてあるので、音頭に合わせてギュッギュッと鳴らして調子をとる。このことを擧をネルという。

海上渡御については天保7年の記録がある。高倉桂翁に招かれた日出藩の儒者小川民徳の筆で、

「暮ニ及ビ翁ト涼棚ニ遊ブ、予ノ後ニ士人舟ヲ浮ベテ至ル、七八艘ナリ、帷張ヲ垂シ燈ヲ無数ニ張り鐘鼓ヲ競ヒ起シ、歌吹間作シテ海中ヲ往還シ、以テ神ヲ娛ム……」と記してある。住吉祭の過去の姿である。

## オハケ神事

北鉄輪天満社秋祭 10月17~18日

松岡実

別府市北鉄輪鎮座の天満神社秋の大祭は、例年10月17日、18日の2日間(元は19日まで3日間)行なわれている。大祭の前日の16日には、神おろしの神事とも言ふべきオハケおろしが厳肅に執行されるが、日本固有の原始信仰をそのまま伝える神事としてきわめて興味深いものがある。

### 1. オハケの神事

神事の概要は、16日午前11時、天満神社社前の一ノ鳥居前に、神社総代7人と座前(頭屋)、組の部長(地区世話人代表)と神官、宮番が参列する。鳥居の両柱に青竹・サカキ・ごへい(御幣)が立てられており、塩が左・中・右の三カ所、そのうしろ中央にモミガラ(ツカという)が山型に盛られている。前面にはゴザむしろが敷かれ、御洗米・ご神酒・野菜・塩・献尾(黒鯛)の五種が供えられ、参列者は神官と共にゴザむしろにすわって祭事が執行されるのである。各鳥居や礼殿、境内のさかいには座前組の手で真新しいシメ縄がはり替えられ、森厳な社叢は清々しいふんい気で見られる。門神祝詞を中心とした神祭は神官の手で型通り行なわれるが、この神祭儀式の中で、年番総代が氏子を代表して祝詞(ノリト)を読みあげるのは他の祭典では例を見ない。

祭事のあと、席を座前の部長の家に移して直会(ナオライ)が行なわれる。この直会の世話、費用は座前

の役目となっており、収穫祭である秋の祭典における重要な儀式となっているのである。そのあと再び天満社に神官・総代・宮番が戻り、拜殿で神官による例祭が午後三時から執行され、ここでも再び直会が行なわれる。

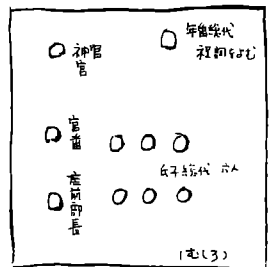
つまり、オハケに降臨した神霊が、いったん座前部長の家に移り、そのあと神殿に移って例祭が行なわれるという形式がとられるのである。

さらに秋の大祭は17日午後2時に始まり、御神輿は、北鉄輪・井田・東・風呂本・上・御幸の鉄輪六地区を巡幸して、御旅所である鉄輪の温泉山永福寺に入る。神社の御旅所がお寺であるのも全国的に珍らしい例であるが、これは鉄輪温泉神社の前身がもともと永福寺(昔は湯瀧山松寿寺)の鎮守である熊野社という由縁によるものである。御神輿は翌18日(もとは19日まで)に再び天満神社に還幸されて秋の大祭は終了する。

### 2. すばふり

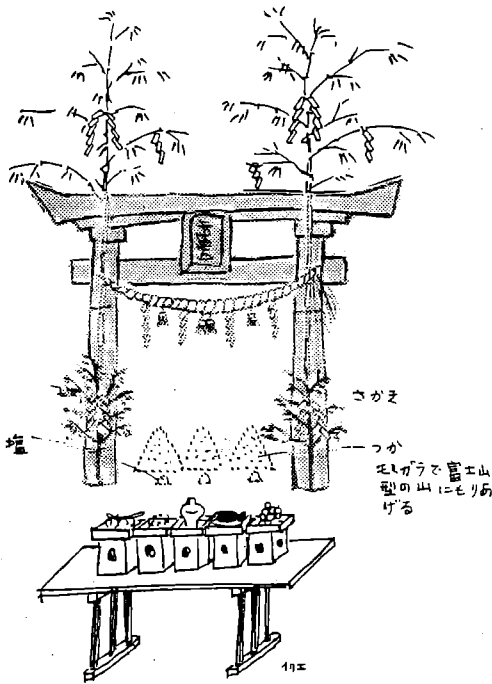
数年前、ふるさとの歌まつりで全国に紹介された「すばふりまつり」は、16日のオハケおろしの前日、つまり15日に北鉄輪地区(西・白島)が座前に当たった

オハケおろしの席席



時やっていたもので、神社境内のシメ縄を張り替えたあと、新藁「すば」をやわらかくするため、地区民総出で体をたたき合い、その藁で大きな大蛇を作って御神木に供える神事である。すばをふりながら大暴れに暴れるが、暴れるほど神様が喜ばれるという言い伝えがあって、その暴れかたはすぎましい。

(すばふりは藁を使う行事であるから、農家の多い西や白畠部落が座前になったときのみ行なわれるので7年に一度しか見られなくなった。また、わらすばで作られる大蛇は、オハケに降臨された神の昇天をたすける龍神であると考えられる。すばふりをして作られた大蛇は8mに達するもので、本殿裏の神木(今は伐採されてない)の根本口トグロを巻くようにして奉納される。)



さて、以上がオハケ神事を中心とした北鉄輪天満神社の秋の祭典のあらましである。形式化したとはいえ後述のように祭り本来の意義が十分それらの行事の中からうかがいとれる点で重要である。

もともと「おまつり」は神様をよび迎えて、これにお供えし、食事をともにして慰めやわらげさせることに始まっている。専門的な神官が生まれるまでは、氏子の中から頭屋(トウヤ)を選らび、頭屋がお祭りを行なっていたのである。後には頭屋は当番(トウバ)とか、座前(ザマエ)とかよばれるようになり、神官をたすけて神饌の準備とか料理や直会の世話などにあたるようになったが、天満神社のばあい、オハケお

ろしの部分で、古い頭屋制の姿をとどめているのである。

オハケとは神のみたまをよび迎える場所で、もともと頭屋の屋敷の門口に立てるものであった。ここにむかえた神霊を本社に移して、初めて祭りが始まるのである。恒久施設の神殿がつくられるようになるまでは、頭屋は禱屋であり、おまつりの主宰者であるとともにおまつりを行なう場所でもあった。

別府市北鉄輪鎮座天満神社のオハケおろしの神事は、明らかに頭屋である座前中心のおまつりである。頭屋(座前)が神官はじめ神社総代(氏子代表)を招いて天降りたまた神と共に直会(神人共食)を行なうのは、古代のしきたりをそのまま伝えている点で意義深い。とくに、この神事が収穫祭である秋の大祭に限られているのは「新嘗(なめ)」のおまつりにおける頭屋の地位の高さをよくあらわしている。

〔史料〕 南鉄輪村庄屋佐藤邸産筆「庄屋役宅日暦」

慶応参丁卯年十月拾六日 風曇

- 一、祭大座北与頭欣次郎ヨリ昨十五日御神酒口開キ御神酒受納候也、御神酒持来るは先例なり
- 一、天満宮もりまき某参詣、但神官皆可罷出事、祭座ヨリ濁酒持来る先例なり ○御宮掃除夫両村ヨリ兩人ツツ可出事 ○今日宮雑仕栄蔵御宮ニ可詣事
- 一、天満宮用燈北金輪ヨリ張替、油三合、蠟燭老斤出候事、来辰当村当前
- 一、今晚御神座北欣次郎勤候、来当某受取、神主加藤佐渡殿来る、出席両村神官、村役人不残出席、外ニ肝煎・宮雑仕罷出る

十月拾七日 晴

- 一、天満宮鳥居の本御はけ卸、夜ニ入り某参詣
- 一、今晚於天満宮社神楽五番可相勤之所…○両村ヨリ宮夜番人壱人ツツ可出候事

十月拾八日 全

- 一、例年之通今日天満宮御祭礼、村中休日、庄屋并神官上下着用ニ而参詣、御神楽三番外ニ大臣返拝御神楽并ニ昨夜之不足御神楽献候也、○其後於神前御神酒披露神官之外ニ北彦助先例ニ而出席、其後御宮道具祭座欣次郎ヨリ当家ニ受取

十月拾九日 曇風小雨

- 一、今晚種渡御神座某并神官皆々出席
- 一、来当当家ニ付粗種受取、兩人北鉄輪与頭欣次郎方江差遣し種四斗七升受取候

# 浜脇温泉と薬師祭り

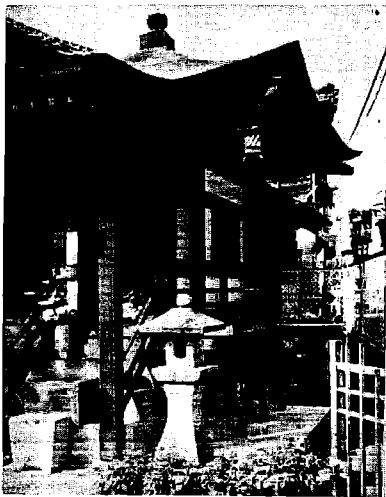
薬師祭り 8月26～28日

堀 藤吉郎

## 1. 浜脇温泉のなりたち

浜脇温泉の歴史は古い。それは神代にまでさかのぼる。伊豫風土記に「少名彦命が伊豫で病気にかかったので、大穴持命（オオムナチのミコト）が大分速見の湯を下樋で引いてきて少名彦命に浴させたところ、やがて生きかえり……」と書かれており、はやくも速見の湯があらわれる。また、秋日本紀十四には命が逆になっているが、同じ神話がある。両方の命が医薬の神であるので温泉による湯治がずいぶん昔から行なわれていたと考えることができる。

「豊陽古事談」によると浜脇の砂湯は、仁賢天皇の二年（491）、豊前彦山の神人に仙術を習った国東郡の砥並仙と鹿仙女の兄妹が開いて、多くの人々の病苦を救ったといわれている。また、鶴見七湯の名付親もこの兄妹であるとも伝えられる。



薬師堂

浜脇の湯は、元来潮湯であったらしく、浜辺に湧く温泉ということから浜涌浦の潮湯と古書に記されている。この潮湯には長わづらいの難病者が群れて湯治していたらしく、用明天皇の御製といわれる

三日月の潮湯にうつる影みれば

片輪もなおる七日七日に

という和歌が残されているのもおもしろい。崇仏廃仏の蘇我・物部両氏の争いに心を痛められた用明天皇が、速見の※吐呂の湯にご療養に来られた時に詠んだというのである。同じ頃、今を去る1400年以前に豊国法師が速見郡に下向し、田野口に阿弥陀院という寺を建て

たといわれる。その法師が浜脇の温泉場に、「名号ひとたび耳に経れば衆病悉く除き身心安楽ならん」と祈りをこめて薬師堂を建立し、自から刻んだ薬師如来像を安置したので、この温泉場を浜脇の薬師の湯と呼んだと言いつたえられている。※吐呂は浜脇の古名といわれる。

天武天皇の5年（676）長（永）石湯や浜脇の湯は太宰府の経営となり筑紫の湯と呼ばれ、高位高官の病氣療養の温泉場として利用されていた。朝臣入湯といったのはこの時代のことである。

聖武天皇の天平3年（731年）には、仁聞菩薩が別府に下り、温泉場に鎮守として医王薬師如来を安置したため、入湯する者は靈湯とあがめるようになった。ついで天慶元年（945）比叡山の僧浄蔵が豊後に来て、豊国法師が建てた薬師堂を再建したといわれる。法師が建立してから350年後のことである。

中世においては、久寿2年7月に洪水のため温泉がつぶれたので、鎮西八郎為朝が家来に命じて修復させたという記録がある。また、大友時代には、今の浜脇中学校のある高台に浜脇屋形を建て義鎮宗麟などは度々湯治のために滞在している。

降って天明2年（1782）に、薬師の湯はもとの場所にそのまま、他の温泉は一ヶ所に集められ、東の湯・西の湯・三日月の湯とした。現在の浜脇の町はこの湯泉を中心に発達した街である。

むかしより豊後の湯といえば浜脇温泉が代表的なものときれ、ひろく西日本より湯治客を集めて栄えた。維新のとき勤皇の公卿関白二条義実や長三州などが潜伏したが、それは湯治客で賑わうこの町がかえって幕吏の目をのがれるのに都合がよかったのかも知れない。

昭和2年7月、中外産業博覧会を迎えるにあたり、東・西の湯・三日月の湯をまとめて西洋風の大温泉を建て一躍近代化した。が、むかしからの湯治場の風情は失われてしまった。

## 2. 薬師堂と本尊

薬師堂は市区改正のため海岸に移したが、水害にあつて倒壊した。その後本尊は崇福寺に移し、祭薬祭のたびに浜脇の旅館で開帳されていたが、昭和44年に浜脇の有志により、もとの薬師の湯の側に薬師堂が寄進されたので遷座した。

御本尊薬師如来は、座高16センチ、光背25センチの座像である。豊国法師作と伝えられ、木喰虫におかさ



れているが崇高なお姿で、今でも善男善女の参詣が多く線香の煙がたえない。

### 3. 薬師祭り

別府の温泉は薬師如来をお祀りしている湯が多い。特に浜脇温泉の薬師如来は靈験があらたかで、ご利益が多いということから、庶民の間で薬師信仰が厚く、毎年8月26日、27日、28日にお祭りが催されるようになった。その起源は安和年間（960年—平安時代—）と伝えられている。浜脇の薬師祭は見立細工がつきもので、当時は竹細工を主とした見立物であったらしい。家具・什器・仏具などを用いた風流見立が盛んになったのは江戸時代末の文化文政期（1800）頃からといわれている。幕末には、松原の漢学者島田謙斎の旧宅島田屋から新町橋まで竹細工の飾りつけが続き、浜脇とのつながりをもたせたこともあった。これは明治35年頃まで続いた。

見立細工は、都より湯治のため長期滞在する公卿や高官を慰めるためにはじまったといわれる。全盛期であった明治末・大正・昭和初期には、旅館は什器を、商家は商品を、花街では張店をあけて歌舞伎人形の段物を飾った。

見立細工とはいろいろの素材のもつ形を生かしてつくる風流見立と、世俗を風刺した判じ物見立であろう。そこに庶民の素朴な創意から醸されるおもしろさがあるとされる。ここ2、3年の見立細工について高橋

新一氏が「灯」に投稿された興味深い一文がある。



風流見立細工

「……風流とは厚化粧の美ではなく、美人の素はだの見える浴衣姿といった優雅さを身上とした……なまじ人工着色したり素朴さをこわすような加工は見た目では本物に似ていても、そのこと自体が本筋からはずれている……」。風流性が失なわれつつあるのは時代の反映かも知れないが、それでも薬師祭の夜は見物人と参拝者で浜脇の町は往時の浜脇をしのばせる人出があり、薬師堂に立ちこめる香煙はむせぶようである。

郷土の祭として風情をつたえるために、前記の高橋氏の言をかりて結びとしたい。「……薬師如来は浜脇温泉の守り仏であり、祭の発祥から1400年の歴史をもつ温泉の行事は別府の他にあるまい。これを別府全市のものとして、……関係者の努力次第では風流見立細工を全日本的なものとなしうるのではあるまいか」。

戦後復活したまつり

## 湯あみまつり

——遍上人と鉄輪温泉——

9月22日を中心に鉄輪温泉の温泉山永福寺では、一遍上人の湯あみまつりが行なわれる。この湯あみまつりは、永福寺に安置されている一遍上人自作と伝えられる木像が、鉄輪元湯およびむし湯で湯あみをされるという全国的にも珍らしい行事である。湯あみをされたあと温泉にはいると一風呂千風呂といい、一回入浴しても千回入浴したのと同じ効果があるという云い伝えから、毎年数千人の人々が九州は勿論、四国、中国方面から訪ずれている。

鉄輪温泉山永福寺

松岡 実

一遍上人が念仏行脚の途中、鉄輪温泉を開かれたのは、一遍上人年譜・豊後国志・豊鐘善鳴録などによると、1276年といわれているから、いまから約700年前のことである。上人をまつる温泉山松寿寺縁起によると、上人が熊野権現の靈告により、全国を遍歴して豊後にきて海部関大権現にもうで、横瀬野口の里（別府市野口）まできたとき、朝霧深く先に進むことができなくなった。さすがの上人も途方にくれると神々しい白髪の翁が現われ、

「いまここに立ちこめる朝霧は普通の霧でない。鉄輪の大地獄の湯気と、鶴見嶽の朝霧が融合した霧である。お前はこれから鶴見権現の加護をえて、この大地獄を埋めよ」

と言い終って翁の姿が消えた。上人はそれから鶴見権現祠（火男火売神社）にもうでて、三七、二十一日間の断食祈禱を行って鉄輪大地獄埋め立ての悲願を立てた。満願の日、再び神が現われ大蔵経を石に写して沸騰する地獄に投げたら必ず大願が成就するであろうと霊示があった。上人は、桂室、未炊軒・桂光院など15人の弟子とともに八町四面といわれた大地獄の埋め立て工事にかかったのである。最後にどうしても埋め立てることができず蒸気のほとばしるところに「むし湯」をつくり広く衆生の医療にあて、満願成就の日、鶴見権現前のクスの木にツメ彫りで南無阿弥陀仏の六字を刻んだ。これが有名な「一遍上人爪彫りの名号」である。



一遍上人と永福寺湯あみまつり  
(大分合同新聞提供)

国主であった大友三代頼泰公は深く、一遍上人に帰依し上人のため一寺を建立して、上人の幼名松寿丸に

ちなみ温泉山松寿寺（又は湯滝山松寿寺）と名付けたが、これが「時宗」初開の道場といわれる。一遍上人の豊后来国は、一遍上人絵巻や前述の書籍などに明記されており、鶴見権現参籠も疑いをはさむ余地はない。故久多羅木儀一郎氏の調査によると、建治二年春熊野山を出立、同年三月下旬郷里の伊豫道後に帰り、ついで九州に移って教化にあたり、大隅正八幡を経て豊後の開基を時宗二祖真教上人とする説もあるが、私は前述のいきさつから一遍上人の鉄輪温泉開基説はそのまま信じてよいと思うのである。

道後温泉をはじめ、有馬、箱根、修善寺、湯本など古来の名湯は多くの場合、高野聖（ひじり）や時宗系の念仏聖・湯聖によって開発され維持経営された例が多い。鉄輪温泉も一遍上人の生国伊豫において盛んだった石風呂に独特の噴気を利用してむし湯とし、医療方面に効顕を現わしたものと考える。

入国ののち、瑞光寺において真教上人と七日七夜の間答を行ない、真教上人は同年一遍上人の弟子となったといわれる。また鶴見権現宮において社頭のクスの木に小刀で名号を刻し、建治二年はそのまま鉄輪において越年されたことを明らかにされている。鉄輪むし湯鉄輪温泉開基一遍上人に感謝する湯あみまつりは、旧松寿寺時代に毎年春秋二季の彼岸の中日と、旧正月23日・8月23日の四回、午前0時を期して洪の湯が白濁するとき、一遍上人自作の木像が松寿寺和尚にだかれて湯あみされた伝統行事を、毎年秋彼岸の中日の前日に行っているものである。

行事は9月21日一遍上人餅つき、湯くみ会。9月22日献湯会、湯あみ会、子供角力、奉納踊。23日一遍上人法要、法話の順で行なわれるが、湯くみ会はやはり一遍上人が開基された熱の湯の温泉をくむ神事、献湯会は鉄輪温泉場の旅館、かし間等から奉納された数百本の献湯の法要、湯あみ会は一遍上人の木像が元湯、むし湯で湯あみされ、そのあと僧侶、稚子行列、信者数百人を共に、鉄輪温泉場の各湯泉浴場を巡幸される。そのとき各地から訪れた数百人の人々は上人興のあとにつけられた大きな珠数玉で手や肩など痛いところをなでて加持するが、その光景は熱狂的である。